

2024/6/17 (月)

朝の礼拝

聖書 マルコによる福音書 4章 35-41節 (新約聖書 67頁)

さて、その日の夕方になると、イエスは弟子たちに、「向こう岸へ渡ろう」と言われた。そこで、彼らは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。すると、激しい突風が起こり、波が舟の中まで入り込み、舟は水浸しになった。しかし、イエス自身は、艫の方で枕をして眠っておられた。そこで、弟子たちはイエスを起こして、「先生、私たちが溺れ死んでも、かまわないのですか」と言った。イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった。イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信仰がないのか。」弟子たちは非常に恐れて、「一体この方はどなたなのだろう。風も湖さえも従うではないか」と互いに言った。

突風

地球の表面は3割が陸地、7割が海です。でも私たちは海について15%しかわかっていないそうです。まして約二千年前、聖書の時代の人びとにとって突然変わる自然現象は謎で、不安と恐怖を煽るものでした。彼らはその現象に驚き、自分の子どもや孫たちにメッセージを残したのです。

私は経験として湖で突風が起きることを知っています。学生時代、毎年夏に琵琶湖の湖畔のキャンプ場にいました。湖ですから湖面は風がない限り、まったく凪の状態です。しかし夕方になると、京都との県境にある比良山系から湖に風が吹き降ろして、海のように岸边に大きな波が打ち寄せます。

イエスの弟子たちの多くはガリラヤ湖の漁師です。この湖でも地形の関係で、夕方に突風が吹き降りてきます。冒頭の聖書にもあったように舟で岸边から岸边へ旅していた彼らは、漁師の頃と同様に、突風に煽られ転覆して溺れるかもしれない恐怖を幾度も経験していたことでしょう。

突風は必ず静まります。命拾いした弟子たちはイエスが共におられる幸いを喜びました。しかしイエスはひとり十字架の道を進みます。もはや誰もイエスと共に進めませんでした。ただ残された弟子たちの心に、たとえ嵐が吹きすさぶ時にもイエスは共にいて、静めてくださるという信仰が生まれたのです。

(しばらく黙祷しましょう)

慈しみ深い主よ、私たちには一日として同じ日はありません。どうか不安や恐れに襲われる時、あなたの慈しみを心に満たし、穏やかで静かな心を与えてください。そして今、わたしに、わたしたちにとって何が大切で、何が必要なのかに気づき、共に慰め励まし歩ませてください。今日一日もすべてをあなたに委ね、よき学びのうちに過ごさせてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン